

---

# I and She . . . (下)

130

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I and She . . . (下)

### 【著者名】

N Z T E R D

### 【作者名】

130

### 【あらすじ】

漂流事故にあったイタル。愛するチナシの元への帰路に着くが・・

(前書き)

「I and she . . . (上)」 の下にあたります。  
and she . . . (上) 「 かりお読みください。」

## 第2章

### 1節

今でもこの出来事が悪い嘘であつたらと想ひつ。

鳴りをひそめていた交信機から、まずは音声が流れてきた。

この船の状態を確認するものだった。

これにサレンパーカー艦長が応答した。

船名を名乗り、乗組員の無事をつげた。

映像の送受信が可能になり次第、再度交信を開始するので、回線を開いておくようにとの指示があり、音声による連絡が途切れた。

「いったいどうしたといつのだ」

艦長の表情は暗い。

「やつと帰つてきたと言つのに、今の反応はなんだ?」

再び、音声のみの通信があつた。

一時間後に全員操縦室に集まるよつもの一方的なものだった。

サレンパーカー艦長以下、乗組員一同、管制官の反応にとまどひづ

かりだ。

長い長い一時間が経過した。

全員操縦室に集まり、操縦席上部の大型通信モニターを固唾を飲んで見守った。

ノイズだらけだったモニターが安定すると、そこには宇宙探査局局長の見慣れた顔があった。

モニターは局長がテーブルの向こうに座っている状態を映し出している。

しばらくの沈黙のあと、局長が語りだした。

- - 諸君。

まず最初に断つておく。

諸君がいま観ているこの映像は、あらかじめ録画されたものである。

したがって、諸君がどのようた疑問に思つても、私は諸君の質問に答えることはできない。

真つ先に浮かんだであろう疑問

何故このような形で語りかけているのか？

ところには答えておいた。

諸君に今の状況を最初に伝えるのは私であるべきであり、確實にそ  
うであるように録画映像という手段を選択したのだ、と。

・・・あまりにもひつたこつけた言いかばかりで混乱ばかりしている  
と思いつ。

実際、事態はそれほどひどいのだ。

(+) で局長はテーブルの上のコップの水を一口飲んだ

とはいって、諸君が今この映像を観ているならば、それは諸君が無事  
に帰路に上ることなどだ。

それもあともう少しここで戻ってきてくる。

おめでとう。

本当に良かった。

諸君が無事帰還してくれたことをほほえんで思いつ。

そして、謝罪せねばならない。

申し訳ない。

(+/-) 局長はテーブルに手をつき頭をさげた

もちろん、諸君は観光旅行に出掛けたわけではない。

危険な任務であることを理解のうえで出航したことと思いつ。

しかし、誰が自分自身以外の身に起こることを予測できただろうか。  
さて、私が諸君の頭に浮かんだ疑問にまともに答えていないことを  
いちだちを感じているだろうか。

正直なところ、答えないのでなく、答えられないのだ。

諸君の身に起きたことを、今の私は正確には理解していない。

ただ、一番最初に謝罪すべきは私の任務だと考えたのだ。

ここから先は、現在の宇宙探査局局長あるいはそれに代わる立場  
の人物が諸君に事態を説明してくれると考えている・・・・

(再び局長はゆっくりと頭をさげた)

モニターに一瞬の映像の乱れのあと、別の人物が映し出された。

操縦室にいる全員が一様にとまどいを覚えた。

「宇宙省長官、サレンパー カーです」

その名乗った人物は艦長にそっくりとは言えないものの外見からくる印象が非常に似ていた。

名前も同じだ。

「皆さん、長い任務お疲れさまでした」

「早速、我々が陥ったトラブルについて説明します」

「長官を名乗る人物は「我々」と言つた。

トラブルは、僕たちだけの問題ではないのだろうか?

「皆さんが出航して、一年……」

「一年というのは、先程の交信での報告でわかつたことです……」

「こちらでは三十年余りの月日が流れました。それがトラブルの全てであり、復旧できるといった種類のトラブルではない点に多くの悲劇が起きています……」

「……今も……」

「それは、俗に言つウラシマ効果ということかね?」

サレンパー カー 艦長がモニターを見据えながら問う。

「我々の船はそのような現象がおこるほどの速度で移動はできないはずだ。過去の航行でも、そのようなことは一度たりとてなかった」

それを聞いてモニターの中の人物は、一瞬悲しそうな表情をした。  
そして……

「それが起きてしまったのですよ……。父さん」

と言つた。

「・・・ジユニア、なのか？」

モニターの中の人物、サレンパー・カー・ジユニアがうなずく。

「艦長の年令を追い越してしまいました」

さみしそうに少しばかんだけつにも見える不思議な表情を浮かべた。

「・・・実は想定したケースの中に、・・・」のよつたなケースもあつた。君の顔を見た瞬間からそつたよつたな気がしてた。しかし、起つて欲しくなかつたケースだ」

艦長も困つたよつた嬉しそうな不思議な表情をした。

「現在私は宇宙船長官という立場にいます」

「個人的な問題は後まわしにしたいところだったのですが、私の顔を見せ、艦長との関係をあきらかにすることだが、いま起きている事態を理解していただく一番の近道だと考えました」

その時、モニターの中に老人がフレームインしてきた。

- 2節  
- 諸君。

改めて言おう。帰つて来てくれてありがとう。

私の生きている限り・・・

(その口調は間違いなく宇宙探査局局長のものだった。)

「」見のよつて老こせりませてしまつた。

しかし、諸君よりも早く年をとつたのは私やサレンパー・カーニュニアだけではない。

諸君たちだけが

年をとらなかつたのだ。我々ほどには。

諸君の任務中に「」では三十年の円日が流れた。

諸君の身内の方や恋人、友人にも、だ。

また三十年あれば、寿命で亡くなる方もいる。・・・不慮の事故も起つる。

私は諸君たちに謝罪するためだけに生きてきた。必ず帰つてくられるものと信じて――

「あなたたちが出航してからのある時点からあなたたちの航跡を私たちは確認できなくなつてしまつたのです」

「長官・ジユニア・がかわつて話します。  
僕たちは黙つて聞いていた。

「深刻な事故が起きたことが予測されました――」

・・見失つてしまつただけなのか、事故によりあなたたちの存在自体消滅してしまつたのか、宇宙探査局では判断つかなかつたそうです。

こちらにこりつしゃる当時の局長だけが、あなたたちの無事を前提に全ての指示をだしました。

いるはずの方向への絶え間ない監視。回線の確保。

民間では大富教授が、この考え方を支持なさいました。

そして、だいぶ後になりますがそれを裏付ける事例もあり、この監視行動は続けられることになりました。

そして・・・再びあなたたちを発見しました。

いくつもの推論の上にシミレーションが行なわれていましたが、いずれも今のところ検証不能であり、あなたたちに何が起つたのかを正確にはお伝えすることができません。

しかし、トラブルの結果はあきらかです。

私たちは三十年、年をとり・・・

・・・あなたたちはとらなかつた。

「私は先程、個人的な問題は後にしたいといふ……という表現をしましたが、実はこの個人的な問題こそがトラブルの全てなのです。

その個人的な問題の具体的な部分にも、ある程度には答える用意もあります。

しかし、このよつなことを急に告げられてもとまどひばかりだと思います。

映像回線がつながったのを機に、各個人にメールにて報告書を送信しています。

まずは各自、「確認願えないのでしょうか？」

そう言われても動くものはいなかつた。

「任務を遂行することができなかつた。その失敗はトラブルではないのかね？」

艦長が問う。

通常のタイムラグよりも長い間のあと、長官が答える。

「……未検証ではありますが、必ずしも任務が遂行されなかつたとは考えられていません」

「少なくとも、任務の目的地である空間にどういつ性質の空間があ

つたのかわかりました。ですが、我々の科学力はまだその空間の性質を利用するところまで進歩していません。残念ながら、みなさん が向かつた空間は現在は航行禁止区域に指定されています」

それを聞いた艦長はゆっくりと目を閉じた。  
わかつた、という代わりに。

「特に質問がなければ、いつたん通信をおわります」  
誰も答えなかつた。

答えられなかつた。

「艦長、最後にひとつだけ

「乗組員の方々への精神的なフォローをくれぐれもよろしくお願ひ 致します」

長官は深々と頭をさげた。

「まずは事態を把握していくください……」

「・・・回線はいきています。大きな問題が発生した場合は呼び掛けてください」

その言葉を最後にモニターの映像はホワイトアウトして消えた。

静まり返つた空気のなか、

「シフト以外の者は各自プライベートルームに戻つて状況確認。隨

時交代してくれ  
艦長が命令を下した。

一同、  
「了解」

と力なく声に出し、僕はプライベートルームに向かった。

### 3 節

プライベートルームに戻りメールの受信を確認する。

一通のメールを受信した。

本文は事務的なものだつた。

血縁者の現在の状況が簡潔に報告されていた。

祖父母は亡くなっていた。

両親と妹は健在。

妹は結婚して子供もいるという。

僕は、知らない間に20歳の姪のいる25歳の叔父さんになつた。

しかし、

僕は自分でも薄情だと思うが、血縁者の近況などよりもっと気にならざつた。

千夏は？

千夏はどうしているのだろうか？

僕のいなかつた「三十年」をどうのづけたのか。

妹と同じように、知らない誰かと結婚して家庭を築いているのだろうか・・・・・。

メールの最後に、

送受信不可能だった期間のメールを別のサーバーに保管しており、一括でダウンロード出来るようにしてあるといふことが記載されていた。

そこに答えがあるのか？

それともあらたにメールを出せば返事がくるのか？

すぐこ？

どんな答えが？

気持ちの固まらぬまま、メールに記載されていた手順でダウンロードを開始した。

受信には時間がかかるようだった。  
モニター眺めていたが、どうぞいいのない不安にかられてプログラ

イベートルームをでた。

ブリーフィングルームには先客がいた。

「ドク・・・」

ブリーフィングルームにいたのはドクだつた。

「おう、イタルか。もう読み終わったのか？」

「レポートは、今、たまっていたメールの受信中です」

「そうか。その・・・、大丈夫か？」

「・・・いえ、大丈夫もなにも、まだよくわからなくて

「そうじやろのう。艦長はここで待つて、誰かの悩みを聞いてくれ  
と言つてたが・・・」

「艦長が？」

「おう。じゃから、なんでもきこてくれ

「なんでもと言われても・・・」

不安なまま過ごしていた日々が、安心する間もなくめまぐるしく事  
情が変わり、混乱しているというのが正直な思いだ。

「何もわからんか

「はい」

「わしも信じられたよ。艦長からその可能性を聞いた時には  
の。でも、わしもジユニアを見知つとつたから、あれを観たら信じ

ないわけにはいかん。これは、現実。いや、これが現実なのじや」

「知つていたんですか？」

「ああ、相談されていた・・・」

思い返すようにドクが語る。

「最初にその推論に至つたのは、アンヌじやつた」

「アンヌが？」

全然そんな風には見えなかつた。

「ナビゲーションシステムについて一番わかっているのは彼女じやからな。システムの状態から考えられることを推測したのじやうつ。  
・  
・」

ドクは話しながら、僕に腰掛けるよつつながした。  
僕が席に着くと、ドクは続きを話し始めた。

「『』の船は高速で移動しています。私たちの持つている知識、技術では計測できないほどのスピードで・・・」

「アンヌが艦長に報告したのは、その推測だけじゃ。

どうしてそうなつたのかといつことや、そのことによつて起つるひとを一人は良くディスカッショソしていたよ。

ナビゲーションシステムといつ計測器を失つてしまつていた二人にとっては、その推論全てが空想と同じくらいうつ昧なものじやつた。

曖昧な話で、ただでさえ不安なみんなに心配の種をさらに時々必要はない。

だから、一人以外でこの話を聞いていたのはわしだけじゃ。

一番、最悪なのは何かに衝突する事故。

または速度に耐えられずに船体が破損すること。

じゃが、システムが役立たずになつてから相当期間無事だったことから考えて、何かそういうことのないように空間に入り込んでしまつたと考えてもよさそうだと推定した。

次に、想像もできんくらい遠くまで行つたあげくに帰れないというケース。

これは充分にありえると推定された。

その時は積んでいた物資の終わりが、我々の終わりじゃ。

想像もできんくらい遠くまで行つたとしても、どこかでこの空間を出る「」ことが出来るというケースが、

唯一帰れる可能性のあるものじゃった。

それでも帰れない可能性に、

そこで正確に転回できない。

通ってきた特殊な空簡に入れない、またはその空間が一方通行である。

といったケースが推定された。

帰れない可能性のどれだけ高いことか・・・

わしたちがこいつて帰ってきたのがどれだけ奇跡的なことなのかわかつてきたかな - -

改めて自分の作業が基準となつた転回の重要性が理解でき、冷や汗が流れた。

「そして、そんなことは有り得ないだろ」と想像していたのが『タイムマシーン効果』じゃ

「タイムマシーン効果?」

「艦長は『ウラシマ効果』と言っていたかな。どちらにしても本當はそんな言い方はしないのかもしれん。でも結果はまさかでそういうことじや」

「相対性理論とかそういうことなのですか?」

「実証されたわけではない。結果から言つてるとじや。わしたちが高速で航行している間に流れた時間と地上で流れた時間に差が出てしまつたために、この船”ホワイトエクスプローラー号”はタイムマシーンになつたのじや」

「未来へのタイムマシーンですね」

「そうじや。30年後の未来へ1年かけて移動したんじや。だが、それは結果じや。計測する方法のなかつた間は、どれくらい先の未来へ行くのも計算のしようがなかつた・・・」

「2年後の未来かもしれんし、100年後の未来かもしれん。それによつても、わしらの運命はまったく違つたものになつていただろう・・・。2年ならたいした違いは起きなかつたかもしれんし、100年後ならわしらを待つ者もいなかもしれん」

「そこがわからなかつたから、何もわからないのと同じことでみんなへは知らせなかつたんですね」

「やうじゅ・・・」

しかし、色々考え合わせると・・・

「でも、気付いていなかつたのは僕だけかもしれませんね」

「うむ。みんなベテランじゅからな・・・」

「うか・・・

「うだつたのか・・・」

#### 4 節

タイムマシーンは開発されてはいなかつたが、未来へのタイムマシーンは理論上は製作可能だと聞いたことがある。

ホワイトエクスプローラー号は未来へのタイムマシーンになつてしまつた。

30年後の未来へ出現する僕達は、

地上の人から見ると、

過去からの「靈なのだろ」つか・・・

現在の千夏・・・50歳を越えているのか? - - にとつて、

過去から現れる25歳の僕は、

相応しい男になつてているだろ」つか・・・

そんなことを考へてゐるとい、アンヌがやつてきた。

「どうだつた?」

心配そうに訊いてくる。

「ええ。不思議な感じです。レポートを読んだだけでは良くわから  
くて・・・」

「そう。クリスと会つた?」

「いえ。まだ会つていません」

「じゃあ、プライベートルームに戻つたのね」

「どうかしたんですか?」

「うん・・・。本人が言つたんだから教えてもいいのかな・・・」

「・・・艦長とダンと私が操縦室にいたんだけどね、クリスがダンに『交代する』って言つてきたの・・・。でもあまりに様子がおかしいから艦長が『大丈夫か?』って訊いたのよ」

「様子がおかしい?」

「もう顔面蒼白」

「で?」

「で、結局、本人が言つには『妻はいなくなりました』って」

「どういふことです?」

「そういう制度があるんだって。この船の行方がわからなくなつてから2年たつた時に、乗組員を死んだことにするか、そのまま行方不明者にしておくか家族が選択できるんだってさ」

「それで?」

「それで、クリスの奥さんは、クリスの死を選択したんだって」

「クリスは生きてるのに?」

「それは、私たちが一緒にいるから知つてることじゃない?奥さんから見たら2年間も音信不通のまま無事かどうかわからぬんだよ?」

「だけど・・・」

「うん。まあ、君の気持ちもわかるよ。実際、私もそう思つ。でも、奥さんを責めることはできないだろ?」

千夏が他のだれかと幸せに暮らしていだとしたら、責めるつもりなどなかつた。

「それはそうですが・・・」

奥さんの為に必死に帰ろうとしていたクリスを思つと・・・。

「そのうえ、奥さんがそういう選択をした場合は、いま彼女がどうしているかさえ教えてもらえないんだって」

「そうなんですか?」

「らしいよ。あたしは今自分の読んだけど、みんなのん気に待つてるみたいだから本当のところはわかんないけど。甥っ子や姪っ子が同じ仕事をしてるので、どこまでエンジニアな家系なんだか・・・」

「そうですか・・・」

クリスは大丈夫だろうか・・・。

「あ、ごめん。それで、クリスがそんなどからダンと交代してくれつて言いに来たんだ。君が大丈夫なら。で、大丈夫?」

「ええ、大丈夫です」

本当は自分でも大丈夫なのかどうかわからなかつたが・・・

## 6節

ダウンロードしているファイルは後で読むことにして、操縦室へ戻った。

ここでも大丈夫かと訊かれた。

大丈夫です、と答えてダンと交代した。

サラが、心配そうに

「本当に大丈夫なの？・・・その・・・あなたにも待っている人がいたでしょ。クリスと同じように・・・」

「僕の場合は・・・結婚していたわけでも、婚約していたわけでもないでのレポートに彼女の近況はなかつたんです・・・だから、本当はよくわかりません・・・」

「そつ・・・。そりいえば、私のレポートもそつだつたわ。血縁者の現況報告だけだった・・・。とは言え私には”待っていてくれる人”はいないのだけれど・・・」

その時、

操縦室内に音声通信が響いた。

「・・・サレンパー カー 艦長」

音声は艦長に呼びかける。

「・・・しばし、回線を私用で押借してもよろしいでしょうか」

「許可する」

艦長が音声に応える。

「ありがとうございます。航海士のサラは操縦室にいますか？」

艦長はサラの方に視線を動かしたのち、

「おります」と応えた。

気のせいかなサラの顔色がおかしい。

「すみません。映像回線に切り替えます」と音声の主が言つやいなや、

モニターに映像が映し出された。

先程、ジュニアがいた席に1人の男性が座っていた。

しぶい

というかキザな感じ

というかワイルド

というか・・ちょっとクセはあるがいい男だ。

「サラ。元氣か？」

と、その男性は言った。

「ロイ・・・」

とサラ。

え？

ロイって、あのサラの？

「ずいぶん待たせたんだってな」

「…………」

ロイの表情ががちょっとひきしまつた。

「おそらく……、俺の乗ったマクロイノ島とそいつの船とが陥つた状況は同じ性質のものだ。話を聞く限りではな」

「良かつた……。生きてて……」

「サラもな。クリスがつまっこいやつたのか？」

「ええ。それに艦長や、ダン、イタル、アンヌ、ドク……。私はチームで帰還したと思っているわ……」

「そうか。それもまた運だな……」

「ええ

「俺は帰還してから15年もおまえのことを持つてゐるよ。……俺の勝ちだな」

「ロイ

「あと少し。慎重に帰つて来いよ

「わかったわ」

「待つてる

とロイは言い、最後に

「艦長、私用ですみませんでした・・・。なんてな。ジミー偉くなつたな・・・。帰つてきたらまた一緒に飲もうぜ」と言葉を残しモニターから消えた。

「・・・驚いたな。あのマクロイノ号が・・・。さすがはロイだ・・・」

艦長が珍しくつぶやいていた。

サラは呆然と立ちつくしていた。

「私にも待つている人ことができたわ・・・と振り向いた瞳に涙があつた。

「やつぱり、帰ろうとがんばってたんですね。信じて待つていたのは間違いじゃなかつたじゃないですか。今度は僕たちががんばって帰りましょう」「

と言つと

「調子にのるな、生意氣だぞ」と笑いながら怒られた。

交代の時間になると、クリスが現れた。

なんと言葉をかけていいのかわからなかつた。

## 7 節

「大丈夫だ。何もしていなにより、何かしている方が考えなくてすむ」

とクリスの方から言つてめた。

そして、艦長に

「ブリッジは僕にまかせて、艦長も一度あがつてください」

と言つた。

艦長も落ち着いた（といつても顔色はえなかつたが……）クリスの表情を見て、

「頼む」

と言つて操縦室を後にした。

プライベートルームに戻つて確認すると、  
ダウンロードは終わっていた。

一つのフォルダがあつた。  
そこに何があるのかこわくて、  
なかなかフォルダをひらくことができなかつた。

現在の千夏を思い描くことができず、

20歳の千夏と、

おやりく50歳を越えた當時の千夏のお母さんの姿が

ぐるぐると頭の中であわつぱいでひきこになつていた。

ダウンロードしたフォルダをひとつ開く。

千夏からのたくさんのメールがあった。  
じっくり読むことができなかつた。  
ドキドキと心拍数があがつた。

文字が眼の中で踊り、飛んで行つた。

To : イタル

From : チナツ

Sub :

ちょっと怒つてゐるんですけど。

”愛していない”ってどうこういふこと?

イタルのいない人生なんて考えられません。  
死んじやうよ。

あの時のメールだ・・・。  
返事くれてたんだ。

死んじやうつて、おい・・・。

To : イタル

From : チナツ

Sub :

死んじやおうかと思ったのは本当。  
メールをじっくり見て、

発信日に4月1日という日付を見つけなかつたら、  
危なかつたかも。

でも、昨日はイタルからの返信がなかつた。

どうしたのかな。

イタル・・・

通信が不能になってしまった後のメールもあった。

To : イタル

From : チナツ

Sub :

イタル

いま

どこでいますか？

私が部屋から出ないので

みんなが心配しています。

事故が起きたかもしれない

と言っているのはみんなの方なのに。

私は、そんなことは信じていません。

ただ、

イタル

あなたがここにいなことがつらいのです。

それでも今日久しぶりに外出しました。

昨夜、

父から聞いた話を良く考えたくて。

外の新鮮な空気を

胸いっぱいに吸い込みました。

見るものすべてがあなたを思い出させます。

庭のベンチを見ては、

二人並んで話した日を、

すれ違う親子連れをみては、

一緒にこどもの名前を考えた日を。

バス停であなたを一目見て、

この人だ

とわけもわからず思つたあの日のことを。

私はいつまでも、

あなたの帰りを

待つています。

いつまでも・・・

こんなに心配をかけていたんだ・・・  
逢えなくてつらい想いをしていたのは、  
自分だけではなかつた。

起こつている事態がわからなかつたのは、  
僕たちだけではなかつた・・・

To : イタル

From : チナツ

Sub :

今朝、夢みた。

とても懐かしい想い出。

起きていっても

夢をみていても

イタル、

あなたのことばかり想つてるけど、

あの場面を夢にみたのは初めて。

私には恥ずかしくて、

イタルの方をみるとことができなかつたので、

あの時、イタルがどんな表情だったのか

わからないせいかも。

大学の研究サークルの新入生歓迎会を覚えてる？

私が入学した年の。

余興をしなければならなくなつたイタルは困つた様子だった。

私はイタルを困らせる先輩たちを許せなかつた。

気が付いた時には立ち上がつていたよ。

その時は恥ずかしいだけだつたんだけど、

何故かイタルを怒らせてしまったのではないかと後になつて思った。

なんて恥ずかしいことをしたのだろうといつ思ひと

嫌われたのではないかという思いで、

しばらくイタルに顔をみせる勇気がでなかつた。

また、兄さんの知り合い経由で母の耳にも入り、すぐしかられた。

「嫁入り前の娘が・・・」ってね。

そのあと、何度も誘つてもらつた。

嬉しかつたけど、どうこう顔して逢えばいいのかわからなかつたよ。

あの時、断り続けていたら・・・  
私たちつきあわなかつたかな？

そんなことないよね？

私の運命の人、イタル。

あの時からじやなくても、  
いつかはつきあうことになつたはず。  
そういう運命。

夢でみたその時のイタルは、  
私の方を見て

少し恥ずかしそうに優しく微笑んでた。

きっと実際のイタルも怒っていなかつたんだよね。  
だから、

やつぱり誘いを断らなくて良かつたんだと思った。

いつかはつきあうことになつたとしても、それまでの時間さえ、惜  
しく思える。

いつそ、

初めて逢った日

から恋人になりたかつた。

そうそう、いつかカラオケデートをしたね。

歌が上手なのに驚いた。

あの時、歌を歌つていたら盛り上がり上がつたかもしれないね。  
でも、イタルが歌が上手なことを私しか知らないというのも嬉しい  
ものです。

イタルのことを好きになる女の子が出て来ても嫌だし。

イタル、

私の運命の人。

いま

どこにいですか・・・

千夏・・・

どんなに僕は、

必要とされていたのだろう・・・

To : イタル

From : チナツ

Sub :

カメはオスよりメスの方が大きくなる

つて知つてた?

うちにいるヒメは、

甲羅の長さがもう30センチくらいあります。

イタルが連れてきたヤマトはまだ12センチくらい。

ずいぶん大きさに差が出ました。

でも、仲良くしています。

羨ましいくらいに。

人間でいうと、

姉さん女房

みたいな感じなのかな？

イタルは、

年上の女性はどうですか？

何歳くらいまでの年上なら大丈夫ですか？

イタル

早く帰つてきて。

逢いたい・・・

千夏、知っていたのか・・・?

そうか、

ジユニア - - 長官が

大富教授は帰還の可能性を支持してたと言っていたじゃないか・・・  
教授は全てをわかつていたのだろうか?

To : イタル

From : チナツ

Sub :

22歳になりました。

家族が誕生日を祝ってくれたよ。  
イタルが来てくれなくて残念です。

1年間逢えないってことだよね。  
でも、  
帰つたら許してあげます。

To : イタル  
From : チナツ  
Sub :  
今日は疲れたよ・・・。  
おやすみ、イタル

To : イタル

From : チナツ

Sub :

ちゃんと1年待つたよ  
イタル

逢えないのもがまんした

なんで帰つてこないのかな・・・

To : イタル

From : チナツ

Sub :

今日は大学の卒業式でした。

主席で卒業だつて、私が。  
イタル、信じられる？

研究ばっかりやつてたのになー。  
だからか。

そのご褒美なのかな。

イタルに逢えるのが、  
一番嬉しいけどなー。

To : イタル

From : チナツ

Sub :

用があつてあるメーカーに行きました。  
そうしたら、偶然会いたくない人に会つてしましました。

誰だかわかる？

イタルの同級生だった、あの先輩です。  
悲しそうな顔で、

「奈良くんのこと、残念だったわね」

だって。

久しぶりにひとのことを無視してしまいました。

だって、

イタルは帰つてくるのに、  
もう帰つてこないような言い方をして。

嫌なひとです。

To : イタル

From : チナツ

Sub :

もうすぐイタルが出航してから2年になります

毎日

年をとつていきます

いつまでも

待つてるけど・・・

わたし  
いつまでも  
若くないからね

イタルが帰ってきた時に

イタルが  
わたしのこと  
わからなかつたら  
やだな・・・

## 9 節

地上では行方不明になつて2年の後、  
船員の死亡を申請すれば、認められる権利が残された家族に与えら  
れたそうだ。

新しい生活を始めることができるようだ。

サラから聞いたロイのケースでは、死亡の扱いになるということだ  
つたが、  
家族の選択に任せているようだつた。

2年というのは、ホワイトエクスプローラー号の積載物資の量から  
算出されていて、その期間を越えての生存は物理上ありえないとい

うこと「らしー」。

ただ、わずかな可能性を信じることを家族から奪わないために、選択できるようにした「らしー」。

僕の家族は、

僕の死亡を受け入れなかつたようだが、  
僕のアパートはひきはらつたらしー・・・

To : イタル

From : チナツ

Sub :

イタルのじ両親が - -

お父様とお母様が - - そうお呼びしてもいいでしょ? - - 先日イ

タルの部屋を引き払いました。

私と兄も立ち会いました。

部屋にあつたほとんどのものは「実家に送られました。

オートバイの扱いには困られた様子でした。

兄が

良かつたらお預かりしましよう  
と申し出ました。

お父様が、

形見としてもらつてほしい  
と申されました。

”形見”という言葉に、

お母様も私もひどく動搖してしまいました。

お母様も、

あなたの帰りを信じていてのだとわかりました。

とにかく、

オートバイはうちでお預かりしています。

放つておくと痛むから

と言つてたまに兄がエンジンをかけていくようですが。  
私のいない時に。

オートバイのエンジン音がするたびに、  
イタルのことを思い出し、

私の胸が痛むからでしょつか。

早く帰つて来て、  
また後ろに乗せてください。

あの日のようにな。

To : イタル

From : チナツ

Sub :

イタルのお母様から電話がありました。

用事はなかつたみたい。

でも、何を言いたかったかはわかつた。

世間話のよひに、

イタルの幼なじみ（？）が結婚したって教えてくれたけど、  
本当は私にイタルのことを忘れるように言いたかったのじゃないか  
しぃ。

イタルを待ち続けている私を、

お母さんは心配してくれているんだと思ひ。

だけど、御自分自身もイタルのことをあきらめられていないから、  
はつきりとは言えないのやじゅう。

早く帰つてきて、イタル。

・・・結婚。

千夏はその後どうしただろ・・・。

20代の千夏

30代の千夏

## 40代の千夏

本当だつたら一緒に歩めるはずだつた年月を

千夏は一人で過ごしたのだろうか・・・

それとも・・・

To : イタル

From : チナツ

Sub :

残念なお知らせがあります。

宇宙探査局のメールサーバーは

もうついタル宛のメールは受付けなくなるそうです。

でも、兄がこの件で相当動いてくれました。

関係各所と話をつけ、

今までのメールでサーバーに残っている分は、

サーバーを分けて保管することになつたようです。

淋しい想いで書いてしまったメールもあるかもしけないけど  
心配しないで。

私の心にはまいつもあなたがいます。

あなたの心に私はいますか？

いつの日か、

イタルがこのメールを読むことが出来ますよ。

そして、

また逢える日を楽しみに

毎日を過ごしたいと思います。

イタル、

運命の人。

また逢える運命だよね。

では

また・・・

ホワイトエクスプローラー号の乗組員の皆様へ

ただいまダウンロードしていただいた電子メールは、  
私も大富研究所が  
宇宙探査省（当時宇宙探査局）から  
業務委託を受け、  
皆様宛の電子メールのサーバーを管理保管していたものから再構成  
したものです。

発信者情報を一部削除していますので、  
これらのメールに直接返信することは出来ません。

ご不明な点など、お問い合わせの際には、  
当メールアドレスにご了承ください。

ただし、制度上保護されている情報など、  
お伝えできない情報も一部ござりますので、  
悪しからずご了承ください。

大富研究所  
管理責任者 大富冬雄

更にもう一通

奈良イタル様

立場を利用してこのメールを記す。

宇宙探査局を退局して、

現在は大富研究所に在籍している。

地上に帰還したら、

研究所に来てもらえないだろうか。

場所は、

我が大富家のあつたところだ。

詳しくはその時に。

大富冬雄

どういふことだろうか。

千夏はどうしたのだろう?

大富研究所?

先輩が何故?

読む前より謎が増えていた。

## クルー達の

いろいろな想いを乗せた

ホワイトエクスプローラー号は、

衛星にある中継基地まで無事に到着した。

基地では、大歓迎を受け48時間滞在した。

常駐スタッフに見知った顔はなかった。

出航した時のスタッフは、

みな現場から引退していた。

心も

身体も

休まるとはなかつたが、

ここからは

お客さん扱いで

シャトルに乗せてもらい地上に帰るだけだ。

することができない分、

いろいろなことを考えてしまった。

「ここにヒビソード

あれは、千夏とつきあい始めたばかりの頃だったか……

珍しく夜中に電話が鳴った。

サッカーをテレビで観戦していた僕はすぐに携帯に手を伸ばした。

相手を知らせるインフォメーションウィンドウには見覚えのない番号が表示されていた。

誰だろ？

こんな時間に。

テレビの音声を絞つて電話に出る。

「はい？」

「・・・石神井です。遅くにごめんなさい。今大丈夫？」

「大丈夫だけど、何があつたの？」

石神井百合。

大学の同級生。

数少ない女子学生だ。

「うん・・・特に何かあつたわけじゃないのだけど」

何もないのにこんな夜中に電話をもらひつまび彼女と親しくはなかつた。

「・・・」

答えないでいると、

「奈良くんて、一年生の夏休み明けから印象変わったよね

と随分むかしの話をされた。

「そう?」

一年生の夏休みに僕は千夏と出逢つていた。

「それと、最近もまた感じが違つよね」

「そうかな?」

「最初に会つた頃は、とても話しあげる気になれない感じだつたよ

「そう?自分ではわからないけど」

(とこつたのは嘘だ。)

「・・・彼女のせいなの?」

「え？」

「なんでもない・・・。就職は決まった?」

「・・・うそ。宇宙探査局でなんとかなるかもしない。来年の試験次第だけど」

「すごいわね。まだこの時期に」

「自分の志望がしぼれただけだよ。まだ何か決まったわけじゃない」

「そう。私は自分が何をしたら良いかわからないわ」

「まだ時間はあるし君は優秀なんだから、志望すれば何にでもなるだろ?」

「・・・」

返事のないまま電話は切れた。

小さな声で、

志望してもなれないものもあるわ

と聞こえたよつの気がしたが、気のせいだろ?。

切れたらばかりの電話がまた鳴った。

「起きてた？」

千夏からだつた。

「うん。どうしたの？」

「・・・」

「なに？」

「・・・石神井先輩から電話いかなかつた？」

何も後ろめたくないのにドキッとした。

「あつたけど~さつわ」

「わいわい。」

「うん。就職活動の話した」

「ふうん。いろんな夜中に?」

「起きてたから出ただけだよ」

「それだけ？」

「それだけって？」

「他に何も話してないの？」

「うん」

「昼間、先輩にイタルの番書きかれたの」

「・・・」

「それからずっと気になつて、寝られないし、やつしたらここのか・  
・」

「なんでもなかつたよ」

「でも、石神井先輩、イタルの」と・・・

僕もそれは思つた。だけど・・・

「行こうか？」

「え？」

「これからそつちに行くへ

「なんで？真夜中だよ」

「朝の門限は何時？」

「えー、そんなのないよ」「千夏がやつと少し笑つた。

「じゃあ、明るくなつたら裏木戸から出てきてよ

「・・・うん、わかつた。待つてる」

真つ暗な夜道を、

僕はバイクを走らせ

千夏の元へ向かつた。

自分の何が千夏を不安にさせめるのだろうか・・・

すいている道を飛ばして走つたので、  
大富家近くの公園に着いた時はまだ暗かつた。

公園の脇にバイクを停め、  
自動販売機で温かい缶コーヒーを買つた。

千夏に、

何か余計なことをしたのかな

とか

それとも大事な何かを忘れているんだろうか

とか

千夏に何かあったのかな

とか

石神井百合は千夏に何をどう言つて僕の電話番号を訊いたんだろう

とか

彼女は結局何がしたかったのだろう?

などなどぐるぐると明るくなり始めてから、  
空がうつすりと明るくなり始めてから、

僕は大富家の木戸に向かつて歩きだした。

時折、新聞配達員とすれ違つたが、  
街はまだ活動を始めていなかつた。

木戸に着くと同時に、

庭の白い靄の中から

千夏が現れた。

千夏はいつでも僕が来たことを察知する。

「・・・おはよひ」

と黙つた。千夏の田の回りは、白い顔の中ほんのり赤みがかつて見えた。

「おはよう。公園にバイク停めてるから歩いつか

こくん

と頷いたが動かなかつた。

顔を見ながら歩き出すと、

半歩遅れて

付いてきた。

公園のベンチに腰掛ける。

ちよつと停めたバイクを

見ることが出来る位置にベンチがあつた。

「はー。何やつてるんだろ? 私

と千夏が大きなため息の後言つた。

びつこひこと?

「本当はこんなこと言いたくないんだけど・・・」

「何？」

「自分が自分じゃないみたい。私ってこんな「だつたかなって思つ」

「こんな「つて？」

「ん・・・」

千夏は話したくなぞうだった。

しづひくじ

「つまらない」とイライラしたり、眠れなくなったり、・・・知らないあいだに泣けたり・・・。私ってもつとクールな「じやなかつた？」

と訊いてきたが直接答えず、

「つまらない」となの？」

と訊いてみた。

じつと考へる千夏。

「・・・つまらない。・・・イタルのことは、どうな」とでも大事な」と・・・

「じゃあ、それでいいじゃない」

「やだ。カッコ悪い。なんでイタルは冷静なの？」

「冷静じゃないよ。頭の中「チャヤ」のままかつ飛んできた」

じつと千夏を見つめる。

「うん。」「めんね」

「僕も」「めん。不安にさせりやつて」

「・・・逢いたかった」

「僕も逢いたかった。だから、来た。・・・呼べばいつでも飛んで来るから・・・。その・・・」

何も言わずに千夏の肩を抱き寄せた・・・

だけど、呼ばれても

すぐに飛んでいけないとこ

僕は旅立つてしまった

僕はある程度の覚悟をして、

ホワイトエクスプローラー号に乗った。

航海は一年間の予定だった。

自分が選んで就いた仕事だったし、  
断るという選択肢は無いに等しかったのも事実だ。

しかし、

こんなトラブルに遭遇してしまつと

”ある程度”の覚悟などなんの意味もなかつた。

一年間逢えないということだが、

こんなにも辛いことだったなんて・・・

千夏にしてみれば、

覚悟なんてなかつただろ「うし、

しかも、

出航してすぐに消息不明になつてしまつた僕を  
どんなに怨んだだろ「うか。

僕は

自分が生きていることを知つてゐるから、

ただ千夏に逢いたい

早く帰りたい

とひたすら思つていただけだが、

千夏は、

逢いたい

早く帰つてきて

と思いながら、

いつ帰つてくるんだろう「うか

”本当に”生きて帰つてくることができるんだ「うかと

思い悩んでいたのだろうと考えると

やるせなかつた。

僕のことがあきらめて  
幸せに暮らしていくくれ

ときえ思う。

クリスだつて、

彼の元を去つた奥さんが  
今は幸せに暮らしていると  
教えてもらえば、

自分の気持ちに区切りはつけられたかも知れない。

また、気持ちに区切りなんてつけられないかも知れない。

それはクリスにしかわからないし、  
もしかしたらクリスにもわからないかもしれない。

今の僕と同じようこ・・・

純粹な客室に乗っているという

珍しい状況に落ち着けないまま

シャトルは空軍基地に着陸した。

着陸時には、

思わず身構えてしまつた。

クリスとダンの操縦に感じるよつな  
圧倒的な安心感もなかつたし、

計器がないことがかえつて恐怖を感じさせた。

シャトルのパイロットが下手なわけはないのにである。

空軍基地からはすぐに移動した。

”普通”は、ここには着陸しないそうだ。

混乱をさける為の措置らしい。

#### 14 節

地上に帰還してからは、

宇宙省の宿泊施設に滞在した。

一躍、時の人となつた僕たちには  
好奇の目が向けられるとともに、  
報道機関から取材の申し込みが殺到していた。

それらすべてを手田省はシャットアウトして、一応の平穏を与えてくれていた。

健康診断を受け、体力がある程度回復するまで外へも出られなかつた。

そして、極秘のうちに僕たちはその施設内で家族との面会をそれぞれ果たした。

どの面会にもぎりぎりなさがあつた。

彼らには彼らの30年の戸口があり、

僕たちにはたつた1年のことだったけれど、

死の覚悟を乗り越えて帰還したという濃厚な1年があつた。

その一つの年月はまったく異質のものである。

お互に異質の時間を過ごした家族は、別世界の住人のように見え遠く思えることもあつた。

それでも血の繋がりといつのはありがたいもので、

親は生きて帰ってきたことを喜んでくれた。

その点はどの家族も似たようなものだつただろう。

だが、夫婦は？  
または恋人は？

無条件でわかりあえる血のつながりはないけれど、築いてきた関係でそれを乗り越えることもあるかもしれない。  
それは人それぞれだ。

僕は家族と一緒に郷里には帰らなかつた。

僕はきっと、宇宙省を離れては生活ができないだろう。

ダンとアンヌ、そしてドクも同じ選択をした。

宇宙探査局という組織は、30年の間に宇宙省に発展していくが、省内に宇宙探査を担う宇宙探査局という部署があらたに存在していた。

僕たちの身元を、そこが引き取ってくれたのである。

サレンパー カー 艦長は、責任をとつて退局した。

誰も艦長の責任を追及せず、むしろ無事に帰還した手腕を褒めたたえられていたが、勇退する道を選んだ。

そして、自分の母親と年齢のかわらない妻と、

自分より年上の息子とともに、かつての自分の家で暮らしあげた。

艦長にどんな葛藤があつたのか、想像することはできなかつた。

クリスは態度を決めかねていた。

僕は、

大富先輩からのメールの内容にとまどついていた。  
どうして千夏がどうなつたのか教えてもらえないのだろう・・・。

クリスにも情報はなかつた。

しかし、僕に比べて選択肢が少しだけ多かつた。

彼の妻が、

クリスの死を制度上受け入れ、

帰還した今も連絡をとつてこないことが、

彼女はクリスと関係のないところで幸せに暮らしているといつことは想像できるが、それはあくまでも想像にしか過ぎない。

第一の人生を尊重する為に、お互に情報を得ることが制度上禁止されているからだ。

彼女がどこでどのような生活を送っているのか――いないのか、生死さえも――クリスには知りようがないのだ。

だが、本当に？

クリスは教えてもらひことはできないけれど、

自らの手で調べることを誰が止められるだろつか？

制度がそれを禁止してはいたとしても。

クリスは迷っていた。

会いたい気持ちと、

会いたくない気持ち。

それは当然

鏡のようだ

彼の妻も持つてはいる気持ちではないのか？

会いたい気持ち、

会いたくない気持ち・・・

そして、

クリスの死を認めてしまったことを負い田に感じ

会えない

会つ顔がないという気持ち。

または、

もつぱおつておいてほしい。

クリスのことは忘れて新しい人生を歩んでいるのだから。  
とこう場合だつてあるだろう。

情報がないとこうひとは、

それらすべてに可能性があるとこうことだつた。

「なんて残酷な運命なんだ。30年後ではなく、300年後だつた  
ならこんなにも悩むことはなかつたのに」  
後にクリスはそう言つたといつ。

しかし、運命は残酷なだけではなかつた。  
サラにとつては、ちょっとした・・・いや奇跡的な幸運をもたらし  
た。

皮肉にもこの航行により、ロイとの間に生じるはずだつた年齢差を  
あまり生まらずに再会を果たすことができたからだ。

ロイが宇宙で行方しれずになつた時の年齢が

ロイ32歳

サラ27歳（推定）

サラが今回出航した時の年齢が  
サラ37歳（推定）

それから地上で15年（ロイの出航から25年）経過後ロイ帰還  
ロイ33歳

さらに15年後サラ帰還

ロイ48歳  
サラ38歳（推定）

元々の年齢差5歳に  
宇宙の異空間で過ごした時間の差  
地上の時間にして5年  
合わせて10歳の差になった。

それ程不自然ではない年齢差といえるだろう。  
それこそ親子ほど年の離れたカップルだつているのだ。  
(ちなみにサラの年齢が推定なのは、今だに彼女が私に年齢を教えてくれないからである)

ロイは自分の経験からサラの帰還を信じた。

だが、それはクリスへの信頼でもあった。

ロイが帰還するまで、

何隻かの船が同じ空間を航行したが、戻ってきた船はいなかつたらである。

ロイはさういと、  
「まつづぐ行つて、くるひとまわつてまつづぐ帰つてきただけだ」  
と言つていたらしいが、  
それがどれほど高度な技術を要するとか。

ロイの乗つた船 - - 宇宙探査艇”マクロイノ” - - の艦長は正直で、  
ロイがいなければ戻つては来れなかつたと語つたといつ。

今はロイの通つた空間も航行禁止海域になつていた。

それでも、  
クリスとサラの乗る船なら、

同じ事態になつたとしても必ず帰つてくると信じていたのである。

そして、同じよつて帰還を信じた者たちがいた・・・

そのうちの一人が千夏だつた。

僕はクリスのよつて

どうすべきか悩むことはなかつた。

先輩のメールにあつたよつて、

大富家に向かうだけである。

そこにどんな事実が待つてこようとも。

そこから初めてどうすべきか悩むことになるのかもしれなかつた。

外出許可が降りてすぐ、僕は大富家へと向かつた。

### 15 節

”30年後”の（僕からみた）未来も鉄道路線には大きな変化はなかつた。

車輛や駅舎また改札口のシステムはさすがに見慣れないものに変わつていた。

そして、全線が地下にもぐつた現在は、昔のように郊外に向かつて縁が多くなつて行く様子は窓から見えなかつた。

何度も大富家へ通つたが、  
こつして電車を利用したのはごくわずかだ。

始めて訪れた時からバイクで通つようになるまでの数回、それに千夏の合格祝い、

そして、千夏に最後に逢つた日 - -

### 16 節

玄関を見上げただけで、  
ガチャリと扉が開いて千夏が出迎えた。

「今日はスースなんだね」  
「へーという顔をしている。

「社会人だから

と言つと、

「お嬢さんをくださーい！ の日？」

と小声で訊いてきた。

「違うよ。出航の挨拶だ

「そつか、残念」

と微笑む千夏はわざと明るく振舞つてゐるよつだつた。

リビングで教授は出迎え、

「そつか、とうとう奈良くんも宇宙へ旅立つか」と嬉しそうだつた。

「はー、ここまではれたのも教授のおかげです」

「君ががんばつたからだ。向ひでもがんばつてきなさい」

「後のことは任せてくれ」と先輩も言つた。

これから出航まで一ヶ月、宇宙センターから外出は出来ないからと  
伝え、

教授と先輩に出発の挨拶をしたので帰ると千夏がバス停まで  
見送るといつ。

ゆつべつと歩く。

「いみんな」と言っていた。

「何が？」

と千夏が明るい顔で言ひた。

「一年も離れ離れにならうことになつて

「うーん。やみしこして言つた行へのやめへえ？」

え？

そうだよな。

一年なんて長いし、気軽に帰つて来るのやめなことにならへ

んだ・・・

「ちゅうど、考え込まないでよ。宇宙飛行士になるのは、イタリの夢だったじゃない」

「うん」

「ちゅうどがまんして待つてるから・・・」

そして耳に口を近づけ

「・・・浮氣もしない」と言ひた。

そんなことを言つてもいなかつたから、ドキついた。

「やんなまじめな顔しないでよ」

とこう千夏の方が一生懸命明るい顔を作つてこねよつに見えた。

バス停に着いて、  
バスを待っている間、何も話すことができなかつた。

バスが來た。

「じゃあ、行つて來るよ」

「うん、元氣でね」  
と千夏は手を振つた。

笑顔だつた。

笑顔で送ろうと決めていたのだろうと思つた。

## 17 節

地下を走つた電車は駅に着いた。

駅はずいぶん立派になつていたが、  
交番というシステムは健在のようで、  
やはり交番の前にはバスの停留所があつた。

宇宙省から支給されたバスで、

電車とこのバスも同じように乗降できた。

みつづめ

のバス停で降りる。

ベンチから

千夏が立ち上がりてくる幻影が見えた。

あの夏の暑い日、

高校生だった千夏の姿が・・・

道の反対側のバス停には、

僕を見送った大学生の千夏の姿が・・・

そのどちらも幻だった。

大富家の建物は、  
建て替えられていた。

もはや個人の邸宅の面影はなく、

小さくかかげられた看板に

「大富研究所」

とあるように、

いかにも研究施設といった感じのおもしろみのない建物に変わっていた。

入口は以前の玄関のあつた位置にある。

僕はそこを見上げて、立ち止まっていた。

「…」まだ飛び出して来ない千夏を不思議に思った。

”帰ってきたよ。千夏”  
心でつぶやく。

どのような話を聞かされることになるのか。

僕はサレンパー・カー艦長になれるのか  
それともクリスのようになるのか…

インター・ホンを鳴らす。

「大宮研究所です」と、  
女性の声が応えた。

「奈良と…」大宮教授はいらっしゃいますか

「奈良様ですね。お待ちください」

といつてインター・ホンがブツと切れた。

どうやら事務員もいる立派な研究施設のようだ。

待つ間もなく、  
入口の扉が開いた。

教授…と思つたのは先輩だとすぐに気が付いた。

「『）無沙汰しています』 そんな挨拶をしていた。

「奈良くん・・・」

先輩はそう言つたきり絶句していた。

急に手をこぎりこむよひに包んで来て、  
「本当にすまない・・・」  
と言つた。

何を謝られているのかわからなかつたが、先輩のつらい気持ちが伝  
わってきた。

「とにかく入つてくれ」

ちょっととした受付スペースと女性事務員が一人ほどの事務スペー  
スを横に見て、  
一番奥の所長室とプレートのかかつた部屋へ通された。

応接セットに大富夫妻が立つて待つていた。

「お帰り、奈良くん。良く帰つてきてくれた」  
年老いたとはいえ威厳は以前のままの大富教授が口を開いた。  
千夏のお母さんの方は、僕の顔を見るなり、  
目に涙がたまりはじめてきていた。

相変わらず美しかった。

良い年の重ね方をしたのだつと思われた。

「お茶を・・・」としほりだすように言いながら、

そのまま部屋を後にした。

そんなお母さんを田で追いながら、先輩が教授の隣に立ち僕を教授と先輩の向かいに座らせて自分達も腰掛けた。

この場に、千夏がいない理由を僕は必死に考えた。

僕とは逢いたくないのだろうか？

不意に彼女の言葉が思い出された。

初めて会った日に、

”・・・三十年後の姿なんて勝手に想像しないでください・・・”

彼女と母親を見比べた僕に向かって言った言葉だ。

あの頃の彼女の母親のように成長した千夏が、

この建物のどこかで息をひそめているのか？

それとも、ここにはもうこなくて、

「千夏は結婚して幸せな生活を送っている」と聞かされることになるのか？

だつたらあつさつと船にいる間に教えてくれても良かつた。

千夏の幸福だけを祈れるように自分自身を納得させる為の時間はたくさんあった。

実際は何が起こったのかわからず、  
もやもやとした想いをずっとかかえたまま  
今日を迎えていた。

「ここに来れば、すべてがあきらかになるのではなかつたのか？」

「奈良くん」

教授がじっと顔を見つめながら口をきく。

「はい」

返事をする喉がカラカラだ。

「どうしても直接私の口から君に伝えたかったのだ

「はい」

重い空気が漂つ。

僕は教授の顔から目が離せなかつた。

思い切つたように教授は言つた。

「奈良くん。千夏は生きていしないんだ・・・」

千夏は

生きて

いない・・・

千夏は生きていらない

と教授は言ったのか？

生きていないと・・・

「すまない。奈良くん」

先輩の声は遠く聞こえた。

「心配せずに行つていい・・・などと君を送り出したことを何度も後

悔したことか。僕は妹を守ることができなかつた

守る？

声にならない。

「事故だつた。防げない事故ではなかつたかもしけぬ。」

事故？

「奈良くん。つらいだらうが最後まで聞いてくれ。何故すぐに君に伝えられなかつたのかも、最後にはわかるだらう。」

そういうて教授はゆっくりとした口調で語りはじめた。

19 節

——千夏は、

最初から宇宙開発にかかる周辺技術へ関心を持つていたようだ。

冬雄や君と同じ大学に入り、  
その道へ進んだ。

君が出航するまでは、  
基礎を学んでいただけだつたから君は千夏が何の研究をしていたか  
知らないかもしない。

そして君は音信不通になつた。

君の消えた空間について、  
私は以前から仮説を持っていた。

その仮説がある程度正しければ、  
無事に帰つてくることも可能性の上ではあつた  
私は千夏に話してしまつた。

君のことを心配している姿を見てはいられなかつたのだ。

ただし、

帰つてくることが出来たとしても  
それはいつ・・何年後・・になるのかはわからず、  
また帰つてきた時には、

出航した時とあまり変わりのない

・・せいぜい1歳から2歳

食料や物資のことまで考えると3歳とこいつのはあつたない・・

歳をとるとこいつもそれへりこの、

千夏の記憶の中のままの姿の奈良くんが帰つてくる、と。

まだ若い千夏にわざわざ伝えなくとも良かつた事なのかもしれない。

しかし私は教えてしまった。

千夏は私に相談してきた。

コールドスリープの有用性についてだ。

何を考えているのかはすぐにわかった。

これから必要になる技術だから、と千夏は言った。

それは私も認めた。

ゆくゆくは絶対に必要になる技術だ。

宇宙へと人類が進出していく様々なシーンで

この先有用な技術であるのは間違いない。

だが、それはいつのことか？

今日か

明日か

来月か

来年か

十年後か

百年後か・・・

まだ、必要のないオーバーテクノロジーだと私は言った。

「だが、基礎研究を始めるのはいいことじやないか?」

私は言った。

千夏がそんな言葉を聞きたいのではないのをわかつていながら。

「私には今すぐ必要なの」

千夏は覚悟を決めていたようだった。

「実用レベルまでの開発したいの」

私は、熱意に負けて協力することにした。

君が帰つてくるのが先か、

千夏が実用レベルのものを開発するのが先か

はたまた君は本当に帰つてくることができるのか？

とにかくやつたいよつにやらいせたりと想つたのだ。

君との想い出に浸り、

死んだよつに過ごすだけの娘の姿を見ていはいられなかつた。

だから、

本当は

無意識のうちに

千夏がそういう発想をするよつに

誘導していくのかもしれない。

千夏の熱意に負けたのではなく・・・

千夏は大学生活の残りを、

すべて「ホールドスリープ」の研究にあてた。

私は、卒業後の受け皿を作るべく、  
ここに研究所を作る準備を始めた。

千夏が卒業したと同時に

この研究所はスタートさせることができた。

もちろん、

海のものとも山のものともつかない研究だけではやっていけないから、

私のそれまでの研究や活動もここを拠点としたとした。

冬雄も事情をよく理解した上で、  
宇宙探査局を退局して、この研究所を支えてくれた。

今では民間では屈指の研究所になつたと自負している。

だが、その内部で「ホールドスリープ」の研究開発が行われていたことを知る者は少ない - -

僕は自分の宇宙での遭難が、  
いかに多くの人の人生に影響を与えたのか、  
改めて思い知らされた。

自分の責任ではないとはいえ、

頭が垂れる思いだ。

教授は話を続けた。

「これは驚異的なことなのだが、

千夏は10年ほどの期間で実験レベルの試作機の開発に成功した。

人間を仮死状態にして何年間も維持できる装置だ。

「仮死状態・・・」

思わずつぶやいていた。

「そうだ。生きたまま冷凍され、長期間生命維持はされるが、ほぼ老化はしない。死に限りなく近い状態だ」

「なぜ、そんな・・・」

「コールドスリープ自体は今後必ず必要になつていいく技術だ。たとえば、移住などを目的に大人数が長期間宇宙航行する場合に、活動しながら移動するのと睡眠したまま移動するのでは、宇宙船の大きさや物資の量に圧倒的な差がでてしまう・・・だから、航行に必要なクルー以外はコールドスリープ状態にするといった用途が考えられる・・・」

「・・・だが、千夏にとっては違う用途の為に開発したのだ・・・」

「・・・ある種、それは未来へのタイムマシンでもあるのだ。君の乗ったホワイトエクスプローラー号が計らずもそうなつてしまつた

よつて・・・

教授が言葉を区切り、僕の顔を見据えた。

「千夏にとつては、君の行き着く未来へ、追いつく為の装置だった。  
・・・」

「自分を冷凍し、君の帰つてくる未来に、冷凍した時の姿で君と再  
会しようと千夏は考えたのだ・・・」

「・・・しかし、装置は完成したが、実際に使用出来るかどうかは  
別の問題だ」

「・・・」

「生きたままの人間を冷凍し、それをまた解凍するなどといつこと  
は誰もしたことないことなのだ」

” 冷凍 ”

” 解凍 ”

人間に使う言葉ではない。

背筋に寒いものが流れた。

「我々は動物実験を繰り返した。数年の方には、モンキーでも成功

した。といつてもスリープしていたのは1年間にしか過ぎなかつた  
し、我々は猿ではない」

心がこの話を聞きたくないと言い始めていた。

だが耳をふさぐことはできなかつた。

教授が話を続ける - -

- - 人間での実験が出来ないことで研究は止まつたかに思えた。

そもそもここまで研究が進展するとは予測していなかつた。

千夏の能力を低く見ていていたわけではないつもりだが、

それは私の予想をはるかに越えていた。

それだけ熱心だつたのだろう。

千夏は何度か自ら実験台にならうとした。

その度に私たちは千夏をとめた。

「奈良くんが帰つてくる保障はない」

とこう引き止めの言葉では千夏はひきさがらなかつた。

「もう逢えないのなら生きている意味がない」と言ひ。

「だから、Jの実験に命をかけてもいい」と。

「帰つてくる保障はないが、帰つてこないと決まつたわけでもないんだ」と言ひとしふしふ納得して、装置をより安全なものへと改良していつた。

しかし -

「しかし？」

「・・・マクロイノ号が地上に帰還した・・・」

ロイの乗つた船だ。

「連日彼の姿が報道された。出航した時と変わらぬ彼の姿が」

- 大騒ぎだつたよ。

今と同じよう。

いや今以上か。

なにせ初めてのケースだ。

そういうことも有り得るとかねてから主張していた私も冬雄も事後調査に駆り出された。

その隙に千夏は装置を作動させてしまった。

そして、自分で睡眠タンクの内側へ入っていった。

調査にひとぐきりつけて、我々が泊まり込みの調査から帰ってきた日は嵐のように天候の悪い日だった。  
嫌な予感がしたのを覚えている。

その予感は残念ながらあたってしまい、

すっかり冷凍睡眠状態になっていた千夏を研究室で見付けた。

それまでも研究室にこもることがたびたびあったから、家内も他の所員も気付かなかつたようだ。

すぐに解凍の準備に入つた。

千夏の想いは理解できるが、

安全性が保障されていない装置で娘を実験台にするつもりはなかったからだ。

長引かせれば、長引かせるほど  
不確定な要素が増えていく。

危険が増す  
ということだ。

命の危険が。

当然のことながら、

千夏は解凍の方法もしつかりマニュアル化していた。

手順に問題がないか何度もチェックした。

そして、こぞ手順の第一段階に着手しようとした時 - -

「 - - この研究所に落雷があつた・・・」

落雷・・・

「一切の電源が落ちた。無停電電源装置の設備があつたにもかかわ  
らず、」

「千夏は・・・?」

「無停電電源装置は瞬時に再起動し、電源は復活した。しかしコールドスリープのコントロール系統はコマンドを受け付けなくなってしまった」

「千夏は・・・？」

千夏はどうなつてしまつたのか・・・  
僕は自分でも氣付かぬうちに、ただ

千夏は?  
千夏は?

と繰り返していた。

「強制的に電源を切ることは、解凍の手順を無視する」とになり、危険が伴う賭けだった」

賭け・・・

僕も同じ軌道で戻れるという保障もないまま  
一か八かの賭けで反転し、

漂流していた宇宙から戻つたばかりだ。

人生は

いたるところに

一か八かの賭けが転がつてゐるのか？

「決断のつけられないままでいる私たちの前で、コンピューターは

暴走したまま生命維持のコントロールも失った

「・・・」

「千夏は眠るよ！」・・・いや眠つたまま亡くなつた・・・

「？」

「ギリギリで生命活動を維持していたところに急激な温度変化を受けたせいだと考へて居る・・・」

話の道筋はわかつたが、事態を理解したくないという心のせいで、何を言われているのかわからなかつた。

きっとポカンとした顔をしていたのだろう。

教授が

「奈良くん。千夏はもう生きてはいない・・・死んだんだ」

とふたたび言つた・・・

千夏が死んだ。

そのことだけがズシンと心に響き、

その重さでやつと理解出来た。

千夏が死んだ・・・

最初から教授は

「千夏は生きていな」と言っていたのに、やつと今自分の耳に届いたような気がした・・・

千夏と再会できなかもしれない - -

と考えたことはあつた。

それは宇宙を漂流していた時にも考えたし  
帰路にいると信じていた時も考えたし  
埋められない年月が生じてしまったことがわかつた時にも考えた。

だがあれこれと思い悩んだ中に『千夏の死』はなかつた。

他の誰かと幸せに暮らしている千夏。

僕の帰りを待つてくれているはずの50歳の千夏。

それくらいしか思いつかず、

僕ははじつこつ顔をして逢えればいいのか、

僕は千夏と逢つたらどう思つか、

僕は千夏を変わらずに變せるのか、

僕は千夏と再会できなかつたらどうしたらいいのか、

僕は、

僕は、

僕は、僕の事しか考えていなかつた・・・

「・・・千夏は常に君のことを探つていたよ  
教授が僕の考えていたことは知らずに言つ。

「すみませんでした」

謝つていた。

「君が謝ることはない。私が千夏に見せてはいけない夢をみせてしまつたのだ」

「そんな・・・」

「私はね、娘は君にやつたつもりだつたんだ。オートバイで出掛け  
ると言われた日、娘はこの男に嫁ぐのだと思ったのだ」

「え?」

「現実に結婚してこの家から嫁に出すまでは、君から預かっている  
のだと私は考えていた」

教授がそんなことを考えていたなんて。

「だから、謝るのは私の方だ。娘を君に渡せなくてすまなかつた」

それまで黙っていた先輩も

「父がそんな思いでいることに、僕は気が付かなかつた。それな  
に君に探査任務を勧めてしまつた。奈良くん、本当にすまない」  
と頭をさげた。

二人は僕に謝つたが、

そんな一人からは、家族を失つた悲しみが伝わってきた。

千夏が亡くなつたのがついさきほどのことのよつこ・・・  
悲しみは今も続いているのだ。

「お嬢さんを幸せにできなくてすみませんでした」

教授の思いを知った時、本当にそう思った。

千夏は

大富家の娘として亡くなつたが、

気持ちの上では

僕の妻として亡くなつたと思いたい。

「千夏は幸せでしたよ」

いつの間にか千夏のお母さんが戻つてきていた。

お茶を運んできたわけでもなかつた。

「」で交わされる会話を思つて席をはずしていたのだらう。

辛くて聞いていられないのだらうと思つた。

でも戻つてきた。

そして、

「千夏は幸せでしたよ」と言つた。

「……こつも奈良さんのことを想っていました。そつ、死の眠りにつくまで……」

「僕も千夏さんのことを見たことはありますん」

お母さんの泣き腫らしたまぶたを見ながら呟つた。

「あなた」

お母さんが僕から顔を教授の方に移し呼びかけた。

「つむ」

教授は難しそうな顔で頷き、

「奈良くん、ありがとつ。君の気持ちは確かなものかね?」と訊いてきた。

「同じ船に乗っていた者たちには、いろいろな運命がふりかかりました。艦長は、自分の母親と同じほどの年齢になつた奥さんと暮らすことを選びました。それが当然だというように・・・。操縦士のクリスの奥さんは、彼の帰りを待てませんでした・・・」

「・・・僕は、一番大切な千夏がどうなつたのかわかりませんでした。でも、どんな運命でも受けとめるつもりでここへ来ました

どんな運命でも・・・」

でも、こんな運命が待っているとは思わなかつた。

## 21節

「ついて来てくれないか」

と言ひ教授に従い、僕を含めた全員で所長室を出た。

所長室のすぐ脇に業務用のエレベーターがあつた。

5人で乗つても余裕の広さだ。

改めて、

ここはかつての大富家という個人邸ではなく研究所になつたのだと思つた。

エレベーターは地下に向かつていた。

建物の入口がある階を2階とすると、  
1階の駐車場スペースの更に下、  
本当の地下にフロアがあつた。

地下1階でエレベーターを降りる。

ゴーっという重低音がかすかに響いていた。

コンクリート剥き出しの素つ氣ない廊下がエレベーターの前を横方  
向に走り、  
向かいの壁に何箇所か扉があつた。

そのうちの一一番左の扉から地下フロアにある一室の内部に入った。

部屋の中央にカプセル型の大きな物体が横たわっていた。

その物体を取り囲むように計器類やスイッチの類がたくさんついた操作盤があり、そこからパイプやケーブルが物体に繋がっていた。

一目見ただけで、

このシステムが

「ホールドスリープ」の装置

なのだとわかった。

「「」」が、千夏の亡くなった場所・・・」

そう言いながら室内をゆっくり見渡した。

千夏を感じられるような気がした。

教授がゆっくりと中央に歩みより、カプセルに左手を置いた。

「「」」のタンクは、外側からも内側からも閉めることが出来る。一人でも稼動出来るように最初から設計されていた」

教授は、こちらを見ず

タンクに置いた自分の左手を見つめながら語っていた - -

- - 中には不凍液を入れ、身体を浮かす構造にしていた。

その液体は特殊なもので、身体の外部も内部も損傷させないためのもので、装置よりはその液体の研究開発こそがポイントだった。

また、我々は液体中では呼吸出来ないから气体も当然タンク内には入れるのだが、气体の成分と気圧も調整した。

冷凍することや、急速冷凍の速度をあげること自体はさほど難しいことではなかったのだ。ただ凍らせるだけなら。

眠りについたあと、安全にそして健康に再び起きてこられる」と。

その為に千夏が考えたのがこの液体を使つタンクだった - -

「 - - 液体と气体の成分、そしてそれらのバランス、または気圧・・・  
・数多くの要素の順列組み合わせを研究し、一定の効果が見込める  
ものを開発した」

「 - - あの、千夏が・・・。生意気ばかり言つていた、あの千夏が  
だよ。その情熱の源は君だよ」

言葉が見つからなかつた。

「千夏の死後、研究データは保存しているが、開発はやめてしまつた……」

教授はそう言つうが、システムが稼動しているように見えるのは氣のせいだらうか。

左手

いや

タンクを見つめていた教授が顔をあげ、

僕の顔を見据えて言つた。

「千夏に逢つてくれないか?」

## 22 節

え?

千夏に

逢う?

教授と顔を見合せている僕に

先輩が言つ。

「千夏が死んだことは、家族と小数の人間しか知らないことなんだ。まして、今もこのタンクの中で永遠の眠りについていることを知るのは家族だけだ・・・」

ゆつくりと先輩の方に顔を動かす。

「千夏が・・・」

「そうだ。そういう理由で君に実際に会つまではこのことを伝えられなかつたのだ。許してくれ」

「あなたに最後に一皿逢わせてあげようと思つて」

部屋に入つてすぐのところで壁に寄り掛かるように立つていた千夏のお母さんが言つた。

「父か、僕のどちらかが生きている限りは君の帰りを待とうと家族で決めたのだ」先輩が言つ。

「暴走してしまったシステムをなんとか、冷凍保存が出来る状態にまでは復旧させた。ずっと、慎重に管理してきた・・・千夏を傷つけないよつこ」

「・・・

「最後のお別れをしていただけるかしら」  
千夏のお母さんの問いに

僕は言葉を発することができず

ただ頷いた。

「君の別れがすんだら、千夏の死を正式なものにして、きちんと葬つてやるつもりだ。だから、君が来てくれることがわかつてからは、解凍の手順に入つた」

「僕たちはしばらく席を外す。タンクのハンドルを廻せばハッチが開くようになつているから」

と先輩は言つて、先に出て行つた両親を追つた。

### 23 節

しばらく身動きができなかつた。

ゆっくりとタンクに歩み寄る。

タンク上部にあるハンドルを廻し始めた。

ビードロップフレッサの音がした。

完全に廻し切つてから、

そのハンドルを掴んだままハッチを開いた。

青白い光が最初に目に入った。

何も衣服をまとっていない千夏の上半身が現れる形でハッチは開ききった。

青く透明な液体の上に千夏は横たわっていた。

水中ライトが青い光を発していた。

液体 자체が青いわけではなさそうだ。

ライトはタンク内側に埋まつていて、タンクの縦方向の側面に2列、ハッチのない足元の方まで続いていた。

丸い防水ガラスの半分程しか浸かっていないから、液体の量も既に本来の深さから減っているのかもしれない。

今は横たわっている千夏を浮かす程には液体は入っていなかつた。

開いたハッチの裏側にも操作パネルがあつた。

単純なものだったので、照明の操作もすぐにわかつた。

ハッチとオンとオフの切り替えスイッチがある。

ハッチになつていたので、ハッチの開閉に合わせて点灯したらしい。

僕はスイッチをオフにした。

ライトが消えて、急に現実感が襲ってきた。

千夏を目の前にしながら、周りのものにしか注意がいっていなかつた。

幻想的なライトが消え、

今は、目の前に千夏が横たわっていた。

青い光源を失つてもなお、千夏は透き通るよつよつと青白く見えた。

千夏・・・

まぶたを閉じ、横になる姿は眠っているよつよつではあるが  
そこから一切の生氣は感じることが出来ず、

千夏は生きていないのでと思い知られた。

生きてはいない、という表現を使った教授の気持ちが良くわかった。

まるで美しい彫刻を眺めているよつよつだ。

千夏・・・

「ただいま」

と口に呟つて並んでゐる。

”おかえり”

ところの返事は返つてこなかつた。

顔は、まぶたを閉じているせいか、以前の表情はつかがえなかつたが、まぎれもなく千夏の顔だ。

何年たつていよいよ千夏は千夏だ。

そういうのは、僕が年を多くどうなかつた側だからなのか?

35歳の千夏もこんなに素敵じゃないか・・・

僕は絶対50歳の千夏だって愛せたはずだ・・・

千夏は千夏じゃないか・・・

やつくりと顔を近づけ、

唇に唇を重ねてみた。

冷たい唇に。

ゆっくりと顔を戻し、

顔を見つめる。

じつと見つめる。

ちよつとおどけた口調で、  
「千夏。王子のキスだぞ。起きないと駄目じゃないか・・・」  
と言つてみる。

でも、千夏は目覚めなかつた。

顔を見つめていると不思議な気分になつてきた。

何かを忘れている。

何を？

あんなに逢いたかった千夏が目の前にいる。

それなのに、千夏は僕に気付かない。

「逢いたかったよ」

口に出して言つてみた瞬間にわかつた。

忘れていたことを。

半年前、夢に女性が現れた。

見知った千夏ではなかつたが、

確かに千夏だつたのだろう

”・・・イタル・・・逢いたかった・・・”

と彼女は言った。

ホワイトエクスプローラー号での半年前は、

”ここ”では15年前じゃないのか？

そのタイミングの一一致に鳥肌がたつた。

見知った千夏ではないが

確かに千夏がここにいる - -

僕が”夢”だと思っていたものに現れた千夏は、

ここにいる千夏 - - 35歳の - - だと確信した。

二人が

逢いたくて

逢えなくて

どうしても越えることの出来なかつた

時空の壁を

死によつて

千夏は

乗り越えたのだ

そして今

千夏はここに眠る

永遠の眠りについた千夏は

美しく

僕の旅の終りを待つっていた

”ただいま、千夏”

そして今度は

千夏が

旅立つ・・・

肉体を離れ

本当の安らかな眠りにつくために

これが別れだ

永遠の

・・・プロポーズする約束

守れなくて

ごめん・・・

僕は一度開いたハッチを閉じることができなかった。

新鮮な空気を吸おうと、  
外へ出たがダメだった。

深く息を吸うことができない。

建物の裏手にまわる。

すべてが変わってしまったと思っていたが、

そうではなかつた。

庭の一角に

見慣れた景色が残つていた。

二人ならんで腰掛けたベンチと、

小さな池。

ゆっくりと歩み寄る。

池にはたくさんのかめがいた。

大きいもの

小さいもの

泳いでいるもの

陸場で甲羅干しきしているもの

その中の一匹が、

やたらとこひからを見つめている。

じつと見つめた。

「ヤマト、なのか？」

僕があの夏

連れ帰った”ヤマト”なのか？

「亀は万年」ともいう。

ヤマトが三十年後の今も生きていってもおかしくないのかもしれない。

さう一匹

甲羅の長さが30センチはあるつかという大きなカメが近づいてきた。

ぼやけていく視界とともに、

千夏の声が心によみがえつて来た。

・・そのうちこの池では狭いくらいにカメでいっぱいになるかも。ヤマトとヒメの家族で・・

これは三十年前の話である。

最終章

あれから、私たちが宇宙を光速かそれ以上の速度で移動していく間

に、残っていた人たちが過ごしたのと同じだけの時間が流れた。

もちろん追い着けるわけでもなく、残っていた人たちには更なる三十年が過ぎただけだし、むしろその前の三十年よりも多くの知人が次の三十年をまつとうすることなく亡くなつた。

亡くなつたといえば、一緒に宇宙へ出ていたサレンパー・カー艦長も一昨年前にこの世を去つた。

艦長は他の乗組員より年長だつたから不思議はない。

そもそも死は誰にでも訪れるのだ。

しかし、母親のような年齢の自分の妻を看取り、自分の息子と兄弟のように同じ時を過ごしたのちに、息子より少し長く生きてから死すことになるとは予想外だつたろう。

生涯の友であるデクがひどくがっかりしている。

クリスは退局して空軍のパイロットになつた。  
しばらくはやりとりをしていたが、連絡がとれなくなつた。  
戦死したという噂もあつたが、定かではない。  
ただ、あれ以来一度も会うこととなかった。

サラはロイと暮らしている。

時空を超えての遠距離恋愛を実らせた二人は幸せそつだ。

ダンとアンヌも、帰還から一年後に結婚した。

今思うとダンにはクリスに尊敬以上の想いがあつたのではないかとも考えたこともあつたが、ダンとアンヌのあいだには確かに愛があ

つた。

しかし、その五年後に一人は離婚した。

きっといろいろあったのだなう。

死が二人をわかつまでもなく、愛は終わることもあるのだ。

帰還してから、何人かの同級生に会って気が付いたことがある。

人は同じように歳をとるわけではないということだ。

実年齢は53、4歳のはずだが、

四十代前半に見える者もいれば、六十代後半に見える者もいた。

その差は、大きくみれば30歳もあることになる。

どう見るかは個人的なものだから、これはあくまでも私個人が感じたことだ。

積極的に会いに来てくれた友人たちは、概して若く見える者が多かつたようだ。

地上で流れた30年の月日は、誰にとつても同じであつたはずなのに、これはどうしたことなのか。

いつかクリスに言った自分の言葉を思い出す。

・・・でも一方で人生経験と実際の年齢が一致するものかどうか、  
僕にはわかりません・・・

クリスは答えた。

・・・例えば実際の年齢が17歳でも精神的には大人のひともいれば45歳でも中身は子供というのもいるわけだ・・・

中身がそうであるなら、外観にだつてこの考えはあてはまるのではないか。

積極的だつたり、好奇心が旺盛だつたりといつ資質で人生を楽しみながら送る者と、苦しみや悲しみにしか目をむけず、羨みながら人生を送る者が、

見た目にも同じように歳をとる、といつ方が考え難い。

どう生きるか

によつて、

たとえ同じ時間を過ごしたとしても

中身も

外観にも

ある程度年齢を重ねた時に違いがでてしまつ。

若いことが素晴らしい

と言いたいのではない。

同じ月日を過ぎるのなら、

中身にも外觀にも

良い影響を与えるような

人生経験を送った方が、

幸せではないかと思うのだ。

私と若い姿のまま再会しようとした、

眠つたままの千夏は幸せだつただろうか。

一緒に月日を重ねられなかつたことよりも、

千夏が幸せな人生を送れなかつたのではないかと思える」ことが悲しい。

彼女の両親は「千夏は幸せだった」と言つてくれた。

私のことだけを想つて人生をまつといつできたからだ。

それならば、私も幸せだ - -

私は - - 、

私は、あれからの月日を一人で過いってしまった。

私は今でも千夏を愛している。

人の死と、愛の死は、

必ずしも時を同じにしないのではないだろうか。

- 時といつものが誰にでも平等に流れるわけではないのと同じように
- ・死

(ア)

著者後書き (\* ネタバレ注意\*)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

冒頭の献辞に「武者小路実篤先生に捧ぐ」と記したように、この作品は武者小路実篤氏の作品「愛と死」へのオマージュになっています。

「愛と死」という作品は、その直接的なタイトルからわかるように、最初から登場人物の「死」が予想される作品です。

それにもかかわらず、その場面（主人公の婚約者の死）で驚き悲しんだ覚えがあります。

ある意味、その構造への挑戦がこの作品でした。

「愛と死」の物語を現代……といつより近未来の架空の星に自分なりに再構築してみたつもりです。

その際、同じく冒頭の献辞に列記したジニー・ホールドマン氏の「終わりなき戦い」を参考にしたSFとしました。

残念ながら、私にはSF的知識が豊富ではないので本格的なSFとしてはおかしな点が多くあると思いますが、SF的な味付けをした恋愛小説であると「容赦ください」。

献辞で両氏の名前を明かしている点

「I and She . . . 」というタイトル（「アイ と（an）d（シ）・・・」愛と死・・・馳洒落です・・・）

から冒頭から本作品はネタばらしをしていました。それをも乗り越えて何か伝わるものがあつたなら、私の挑戦は成功なのですが、いかがだったでしょうか・・・

最後に

「I and She . . . 」を「I&C」と読み替えてください。

この物語は

Itaru & Chinatsu . . . の物語、でした・・・

ありがとうございました。



## (後書き)

著者後書き (\* ネタバレ注意\*)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

冒頭の献辞に「武者小路実篤先生に捧ぐ」と記したように、この作品は武者小路実篤氏の作品「愛と死」へのオマージュになります。

「愛と死」という作品は、その直接的なタイトルからわかるように、「死」が予想される作品です。

最初から登場人物の「死」が驚き悲しんだけ覚えがあります。

ある意味、その構造への挑戦がこの作品でした。

「愛と死」の物語をを現代・・・というより近未来の架空の星に自分なりに再構築してみたつもりです。

その際、同じく冒頭の献辞に列記したジョー・ホールドマン氏の「終わりなき戦い」を参考にしたSFとしました。

残念ながら、私にはSF的知識が豊富ではないので本格的なSFとしてはおかしな点が多くあると思いますが、SF的な味付けをした恋愛小説であるとご容赦ください。

献辞で西氏の名前を明かしている点

「I and She . . . 」というタイトル（「アイ と（ an  
d ） シ」・・・「愛と死」・・・駄洒落です・・・）

から冒頭から本作品はネタばらしをしていました。  
それとも乗り越えて何か伝わるものがあつたなら、  
私の挑戦は成功なのですが、いかがだったでしょうか・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2723h/>

I and She . . . (下)

2010年11月6日01時28分発行